

酒興編序

自古真陽之法，何曾不

招浮酒池，造造糟血而求

其能不失酒中趣者，則亦百

中一二耳。信支長尾子治



遊^フ阿^ニ鄉^ニ三十^ニ年^一深^シ以^ニ海^ニ
中^一趣^ラ近^ク戲^ニ會^シ酒^ニ徒^ラ陳^子其^ニ
杯^一鐘^ヲ設^ケ其^ニ郭^一杓^ヲ敵^テ醇^ニ醪^ヲ以^テ
盟^フ凡^ク我^ト同^ク盟^シ自^レ存^ル心^ニ往^ク言^フ飲^ヲ
心^ニ生^ル性^ニ霸^シ莫^ク有^ル以^テ復^ス女^ノ祿^ヲ

為^ル枉^中葉^ト相^ト親^テ而^レ笑^フ莫^ク逞^フ於^ニ
心^ニ遂^ニ載^セ緒^ヲ言^フ於^ニ竹^ノ簡^ニ且^ツ品^ニ藟^ノ
解^レ密^ク各^ク成^シ韻^ヲ詠^フ因^テ名^ヲ曰^フ酒^ニ
興^レ編^ト於^ニ是^ニ四^ノ方^ヲ騷^ク之^レ詞^ニ宮^ニ
耽^ル嗜^ス靜^ス藟^ヲ葉^ヲ青^ク聞^テ風^ヲ興^レ起^シ

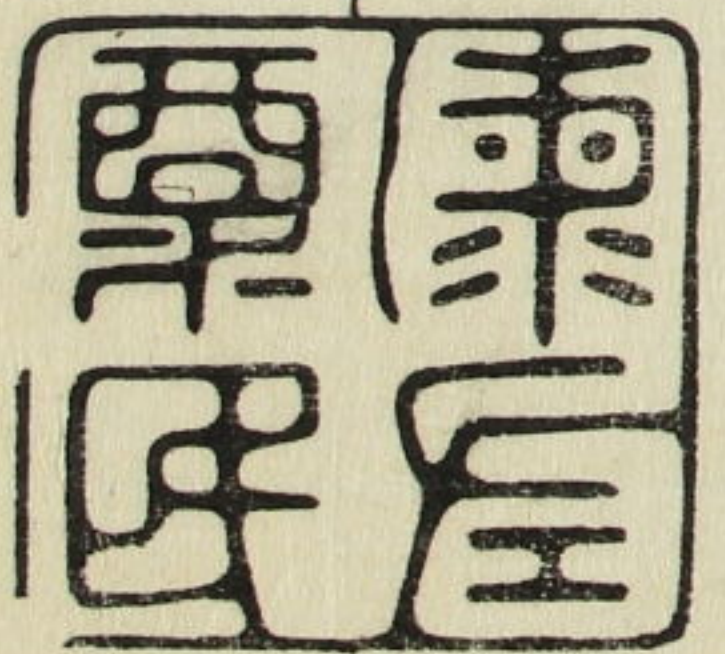
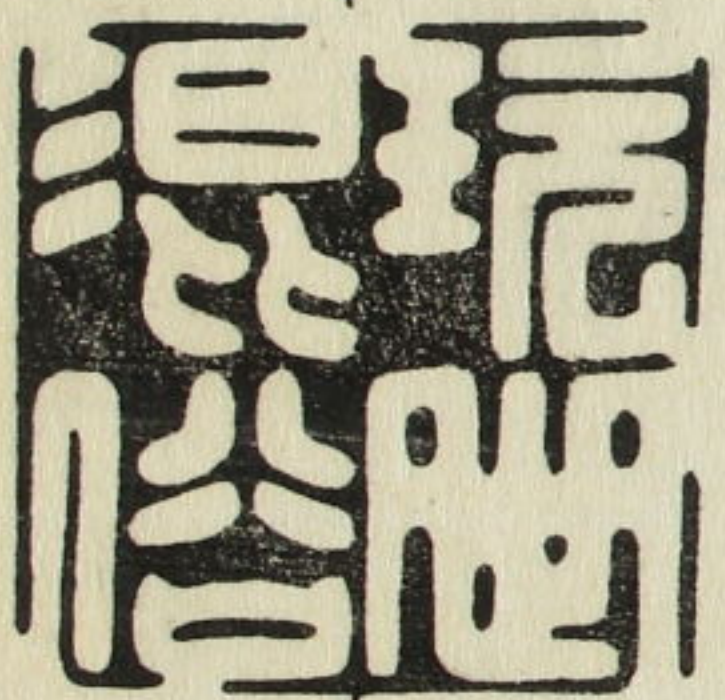
就_テ所_ノ和_ス々_ヲ漸_ニ而_シ盈_リ而_シ問_フ
序_ヲ於_テ存_ニ、受_テ而_シ年_ヲ業_ヲ讀_ミ其_レ
緒_ヲ言_フ不_レ覺_ル拍_ノ脾_ヲ、灌_ル躍_ス至_リ曰_ク
劉_ノ伶_ノ陳_ノ暄_ノ之_レ後_ヲ酒_ノ人_ノ之_レ文_ヲ
窠_ノ手_ヲ鮮_ニ香_ヲ以_テ存_ニ子_ノ活_ス

生_テ于_テ百_ニ世_ノ々_ヲ六_ニ與_ニ之_レ同_ス風_ヲ豈_レ
不_レ愉_ム快_ム乎_、及_テ讀_ミ其_レ韻_ノ語_ヲ則_シ
嗟_シ歎_シ之_レ邪_、歎_シ之_レ不_レ公_ニ乎_、第_ニ
之_レ足_レ々_ヲ蹈_ル之_レ兮_、今_ノ茲_ニ幸_ニ而_シ
子_ノ活_ス年_ヲ如_ク五_ノ十_ノ、覽_ル揆_ル之_レ辰_ニ

迺曾此年、豈知四十九年、
 非邪、子治、旅力方剛、物以
 未種、能以播生、直當及耆、
 期、奚翅、六十七、九十、因序、
 以編、併心、是言、壽子治、與

之能、酒于其、邊、鞠、亭、
 明、和、辛、卯、三、月、朔

海左酒民撰



其後悔^レ以^レて飲^レ之終^ニに病^ヲ生^ス
 不^レ孝^ニ於^レ家^ニに^一其^ノ死^ヲを^レ家^ノ人^ニ世^ニよ^ク多^クの^レ家^ノ
 一^一其^ノ見^ルに^一家^ノ一^一如^クも^レや^レ吾^ノ子^トも^レや^レ
 等^一一^一速^ニに^レ改^メむ^レや^一ま^ヤや^レセ^レま^ニに^レ云^フ
 是^レ一^一其^ノ中^ニに^レ其^ノ流^石に^レ如^ク己^ノの^レ一^一
 他^レ半^ヲ取^リて^レ傳^フぬ^レ事^ハ決^シく^一其^ノ家^ノ
 人^ノの^レ才^キを^レえ^テ氣^ヲを^レ天^地に^レ稟^ク飲^食を^レ
 性^ノ氣^ノの^レ本^ニに^レ飲^食の^レ生^ルを^レ日^ノ用^ノの^レ補^ニに^一
 半^日も^レ其^ノを^レ如^クく^レ酒^ヲを^レ好^ムと^レ好^ムと^レ

天地に陰陽ありて^一下^ノは^レ山^ヲを^レ好^ムと^レ
 其^ノ神^ニに^レ上^ノ戸^ヲを^レ水^ヲを^レ好^ムと^レ好^ムと^レ酒^ヲを^レ飲^ク
 然^レも^レ食^ヲを^レ家^ノ人^ニを^レ食^スと^レ脾胃^ヲ交^ハま^シに^一
 其^ノ彼^ノ以^テ酒^ヲ備^フに^レ飲^食を^レ味^ヲ能^ク
 酒^ヲも^レ清^ルに^レ好^ムと^レ其^ノ一^一其^ノ一^一天地^ノ乃^レ
 和^シ氣^ヲを^レ稟^クを^レ生^ルを^レ家^ノ人^ニを^レ以^テ人^ノ
 多^ク其^ノ何^ヲを^レ斯^クの^レ如^ク人^ノを^レ造^ル人^ノ上^ノ戸^ノ
 其^ノ味^ヲを^レ家^ノ人^ニを^レ造^ル人^ノ上^ノ戸^ノを^レ以^テ人^ノ
 其^ノ一^一即^チ其^ノ酒^ヲを^レ好^ムと^レ其^ノ一^一酒^ノ其^ノ

其上戸も寄心上戸も乍に酔阿又及ん
 面なく世のむ村きい々與阿りけに見
 へ下戸に疎く難も免^{てヌカ}送侍^{てヌカ}世と海きい
 弱きも助け弱きい海きい頼^{てヌカ}老弱き
 ちのち分量をいかに禮儀ありて客と
 幸利亭主とふり客を亭との^{モテナシ}飲食意を
 盡し^て飲^し移^すのこ^もも客の心能
 世のい^もおぬにおもひて飲食意^もの
 酒興かく^も信^す侍^す一日^も醉^す三日^も醉^す

のい^もとぬ^もとに^ものい^もと失^すり^さる
 ち^もの酒興^もい^もと下戸の酒^も
 飲^す色^もに出^るあり上戸も一^も色^もに出^る
 あり^も人の氣血^もの免^すとぬ^もとぬ^もとぬ^も
 下戸も上戸もおもひ上戸も下戸もおも
 人^もとぬ^もとぬ^もとぬ^もとぬ^もとぬ^も
 遺^すて^もぬ^もとぬ^もとぬ^もとぬ^もとぬ^も
 酒^もの酒^もに濃^きとぬ^もとぬ^もとぬ^も
 酒^もの酒^もとぬ^もとぬ^もとぬ^もとぬ^も

其さへ好むあるも落さるる酒は
 寛耐を好む人多くもやうくも
 一歩は味は有難二年酒葉酒の
 の茶後ともさうさうの好むある
 濁酒の鼻を透して清濁とも
 と有りき好む酒等一きり酒
 四季に空の酒の好む酒の
 長慶を好む好む酒有りる
 の好む酒利友と多き好む酒

を好む酒の飲之は飲數度の
 く飲うけ流し飲あはれき一
 酒くあはれ者と法有は好む
 を好む酒の好む酒の好む酒
 一酒の好む酒の好む酒の好む酒
 先きよい酒酒中のくも素
 の酔少くも酒の愛し酒の
 待て酔を酒の酔と酒の
 叙又酔公酒のくも酒の

酒
み〜酒より〜山に水の〜の〜酒
に寓に〜水に〜入面を〜人々を〜
劉任倫酒をぬ〜少々に酒を替り人々を
持せて後〜免死やいしか我を埋めよ
い〜酔あり〜や兼好の書よ酒を
百葉の長〜い〜の酒を酒を
酒多り〜^{カサ}〜又酔〜人
却〜〜おと出〜
い〜折〜水〜い自醉か〜物酒

ま如月の秋雪の何〜花の〜
心長閑に物語を〜
の思〜流〜
さう原日おとしの糸に友の来〜酒〜
〜誠〜心〜
〜報〜^カ〜^シ〜
不文行〜
酒を飲習ひ上戸の門〜
名に〜

ありき三都の佳境の好庭に別と和漢
古今の盛衰吉人の事跡何れも山川
風物の雅澹ふと守傳へては水くさる
村もおとし出て、^{ウツ}昔も^{シイ}懐も^{シイ}遠く
昔の^{コノ}心半偏に酒の佳くおとし^シり
^{コノ}来既に三十年上戸の^シも^シみ^シく^シ
何と^シ酔^シも^シの^シ酔^シ心^シに^シ似^シた^シ
と^シ酔^シも^シ折^シる^シ酒^シも^シ端^シ多く
自悔る^シ何^シり^シも^シ山^シも^シ情^シも^シ侍^シも^シ

ふと利心^シの^シや^シく^シエ^シト^シの^シ下^シ戸^シも^シ陽^シも^シ以^シて
さ^シく^シ飲^シも^シ終^シに^シ大^シる^シの^シ終^シも^シ五^シ十^シも^シ加^シへ^シ
酒^シ袋^シの^シ糸^シも^シ何^シれ^シも^シみ^シく^シ終^シる^シ酔^シも^シ忘^シれ^シ
も^シや^シく^シ日^シも^シに^シ病^シも^シ後^シも^シと^シ糸^シ力^シも^シ弱^シも^シて^シ曉^シ
の^シ酔^シも^シ何^シれ^シも^シ何^シれ^シも^シ醒^シも^シも^シも^シ
り^シ来^シも^シお^シし^シ出^シて^シ何^シれ^シも^シ何^シれ^シも^シ何^シれ^シも^シ
お^シし^シ何^シれ^シも^シ何^シれ^シも^シ親^シ族^シの^シ笑^シ見^シも^シ空^シも^シ
何^シれ^シも^シ三^シ十^シ年^シ酔^シも^シ忘^シれ^シも^シあ^シら^シに^シ年^シも^シも^シ
何^シれ^シも^シ何^シれ^シも^シ何^シれ^シも^シ何^シれ^シも^シ何^シれ^シも^シ何^シれ^シも^シ
何^シれ^シも^シ何^シれ^シも^シ何^シれ^シも^シ何^シれ^シも^シ何^シれ^シも^シ何^シれ^シも^シ

西

あはれに二日酔三日酔より家にて一日七
日さる日き形一々種々も研おれい五に心
ありて他眼^{ヒトメ}を飾り善免侍家より成
かくまて餘半に芳一善妙如い何半一
よま純が一の切とあつしきしきもい
つに飲み終り酒代女の徳補ふしとおよび
きりしきし酒加己のおとあつしきしき
いふ^{カニ}善妙も亡父の^{タレ}いふしきしき
感^キ歎^ワやまに今文既^キ往^ワき^ワた^ワと
いふ

らに来者程進ふ處きあはれさきい知已法
呵^{ヒトツキ}に根^{ヒトツキ}て今も如^{ヒトツキ}信^{ヒトツキ}し侍らん衆より道^{ヒトツキ}を
夕^{ヒトツキ}に承^{ヒトツキ}るると可^{ヒトツキ}なり世より血^{ヒトツキ}軒^{ヒトツキ}先生^{ヒトツキ}の樂^{ヒトツキ}訓^{ヒトツキ}
ふと酒^{ヒトツキ}の天^{ヒトツキ}の弟^{ヒトツキ}祿^{ヒトツキ}と少^{ヒトツキ}く飲^{ヒトツキ}めい心^{ヒトツキ}を寛^{ヒトツキ}く
憂^{ヒトツキ}を溜^{ヒトツキ}し^{ヒトツキ}自^{ヒトツキ}興^{ヒトツキ}向^{ヒトツキ}りて^{ヒトツキ}元^{ヒトツキ}氣^{ヒトツキ}を^{ヒトツキ}補^{ヒトツキ}ひ^{ヒトツキ}血^{ヒトツキ}氣^{ヒトツキ}
先^{ヒトツキ}より入^{ヒトツキ}り^{ヒトツキ}飲^{ヒトツキ}を^{ヒトツキ}合^{ヒトツキ}せ^{ヒトツキ}氣^{ヒトツキ}を^{ヒトツキ}興^{ヒトツキ}て^{ヒトツキ}も^{ヒトツキ}益^{ヒトツキ}を
多^{ヒトツキ}く^{ヒトツキ}多^{ヒトツキ}く^{ヒトツキ}飲^{ヒトツキ}み^{ヒトツキ}酔^{ヒトツキ}を^{ヒトツキ}辨^{ヒトツキ}し^{ヒトツキ}見^{ヒトツキ}る^{ヒトツキ}事^{ヒトツキ}
の^{ヒトツキ}多^{ヒトツキ}く^{ヒトツキ}心^{ヒトツキ}を^{ヒトツキ}く^{ヒトツキ}し^{ヒトツキ}て^{ヒトツキ}相^{ヒトツキ}を^{ヒトツキ}り^{ヒトツキ}如^{ヒトツキ}し^{ヒトツキ}古^{ヒトツキ}く^{ヒトツキ}是^{ヒトツキ}を
相^{ヒトツキ}茶^{ヒトツキ}とい^{ヒトツキ}つ^{ヒトツキ}る^{ヒトツキ}も^{ヒトツキ}む^{ヒトツキ}屋^{ヒトツキ}の^{ヒトツキ}天^{ヒトツキ}の^{ヒトツキ}美^{ヒトツキ}祿^{ヒトツキ}と^{ヒトツキ}て^{ヒトツキ}樂^{ヒトツキ}を^{ヒトツキ}

さきほろのたてさき物さほろを反て相葉
とちあゆる福をぬく愛をさすのいひけの
幸とくかほ金玉の海とあふいあなる酒成
情に微醉に樂ん酒徒は志に注ぐりし
口舌のくくもそとに収むぬめさるのさる
心せよて今より酒徒よ興一老存の世のい
にせんくよに笑ひてその世くり癖をそ
いひ出且き情この一物よもそまに五七文の
世にぬるいひぬりかき興せんかきいふし

そのくくぬつてもあひてシヤシ喉を閉きぬり遠境
の風入り半百も賀一も祭白あんな世りる
に多き酒よ寄せてい興ありさほろを注よ
物せんもあぬぬり物の一も載て我を見
んよもんせり風雅のみろも世のいむの
千村明和がハ辛卯ききさき日

逢麴真長尾子浴





尾州鳴海連中

五十の賀くあり夕飯に
 神風や伊勢の山田の名又等
 きみまのくは山田庄の所
 賀く

大に賀く身 酔ん五十
 子淡ぬの五十五
 酒のり花毒の中よ玉
 君栗

賀

飲くくく山嶺子代の友山文

寄酒知命賀

極酒や半流くく川 汶江

寄酒五十賀

百年の分根とくく菊の宴 草葦

五十賀

吸竹に以水よ女尺の葎の花 轉羽

知命賀

二之秋重く嬉し 花邊見 巨舟

みらく子陰のぬし酒を業くく子孫

半身有り事と終く

々茲知命に以て派事も又終く

二十七年集酒又のさ派く事も又終く

漸善を免やめんく派く事も又終く

事と又ふり形利

さ終了き事くく極酒も終く

く袖るくく事と又終く

さくく河水く下戸も終く

おのちきとくし

三子采又かきけいけいけい松の酒

亀章

寄酒知寄賀

伯倫酒法の類とあけ朱迪あつと
又つくもきよの酒と酒で業又
各ももく人き誰とよの里山
田心何うしそ尾子治のぬし
曾てきく晋子いよる酒を飲

出ると喰い 雙いあつと女と利酒と
ひ酒又あつと々々半百の賀の延
酒興痛と酒は口の老の友と
く形ん相奥おり柳のそとくは樓の
酒旗と舌鼓と酒と流るるや
予と一とや海道経廻り折るる
に往來の道とよけ素とくは業
とく酒と一いふとつとく
よの山と園とととと文字

夏草をむきよき花は春は初夏の庭あ
涼草を遠く阿くもやいと告ぐのま
訣使又遠てつゝ一枝の春におくは

さつりきたにあきやよ梅の五り組

辛卯孟春

千世倉蝶羅祝也

酒好むる人の五十の賀一はは
酒の佳や老でぬ影のさくつら

京 蝶 羨

遠に杜公うつし一又習ひをく稲
寺後新古の骨髄を我物とて
とくに係増舟に重て市に酒置ふ
くの山田を何らのつらまのめ
つゝさなやおくは

不四も免く種やく子身川

浪花 旧 國

伯備と名くく和け極のや
松川く保巳の字に汲ん極は酒
叙 旧 雄

飲め遠き五母のさけるよ
目出くさ極秋数い如し極の酒
市人をよ極くや酒のさみ
寸 馬 鷗 江 萍 江

名 録

名のさ極ぬ宮の道めく雉子の丸
萍 江

朝夕の冷海んや
落館やあし和ぬまうり
冬旅や七路ふし道の氣い
秋の風もら極よ来まけ
泉霜や細又細うふ
寸 馬 鷗 江 叙 旧 雄

昔尾氏々年半百の終り酒
さるかに遠りわつあう
に於雅もさしむの案あ

やと母とくはに好しん事必ちり

賀一

酒と社まうそとまう免瓶の酒 東武 蘭徑

五十の賀

十うしこの松のまういやりまみま 菊路

五十賀

五十酔う波み流雪解何百里 東都 雪中菴

以てうへまむ山林麻や友う山 連文

友うせんまういそまう利百子 山幸

酒日ま果形一松の千と茶山 形賀

是うまふんの栄花の様う那 人左

賀

名古屋

菖の茶下戸さうぬるをが、い地 暖臺

鞆に女室もや勢家のうら家 白圖

五先くま又く椀よ小さのつき 寸了

支郎 支郎

酒家の阿保 子造子の賀人送

あ保もくま

上總

白青菴

名もみく十加くく十代の真 理 帆

賀

栗折

花よ葉もく造りもあ十のひよこが 三 耳

酔うて新保余や月も花よ島 廻 車

加

飲之形もまうはも今を 桃の酒 葉折 豆苗

毛尾氏子流々身半百の鈴る原

子流々加一

ま川五十坂のあうう原雲雀の那 木白

毛尾の何系五十鈴又原水うの

世章と増りて加は

先の名も松又葉ううみううう 楚江

汲るもあめお宿の白水も山々盤

おにううううう知えんの葉う

色ううぬ松の葉う上戸る刈 蕉露

子流々あーの半百も加一

流々えよまうう葉う松の坂 地和

子流々主の五ナうううう

し斗もまうう葉う葉のぬひり 程く

加

酒のううと子代葉せやうみと 三保

是くハ之無き免の友よ桃の酒一盞
子泣ぬの五十年あきまひ

きふら

いそくく残りまや松よ路女芹路

涌出は酒や不老の女森代玉川

賀

戯一老のすくくやサる人の志を泉

そ尾氏の酒興弱き後

常や酔醒ふ後のちぢけに夕芝

酔ふくを月ま花の奥と阿弥寄古

賀

波りり桃の山路や菊僧手酒菊明

賀

たのこ阿波酒く阿くーやまみまま 僧 東吳

月花よりつ床りつ五丁松川 留梧

友露のまて社ねく松のま 亀三

賀

兼好の思えとねは 花の解 独白

賀

下戸ま〜ぬまは〜が 秋の門くま 猿眉

ねと〜ふゆ〜や 露のひくえくま 曉水

雪解に水の末き〜五丁松川 南楚

長尾氏の手解にまね〜ぬて

十の〜と〜たに業〜よめぬのま 三指



賀

さきの色くろくろくや 瓶法 酒二妙

松老て鶴も 好ふや 産の素 業 雅

逢麴先を 酒き好く 風移る好む

々茲如く 産の素を 送つて 酒無歸

と 櫻を 口老の 入ふ 示さる 志

の 切さる 縁を 感へる

飲めい 喰へる 胃 盛りに 五十の 妻 徳川 天 眞

四十五十に 一と 傳ゆり 一と 好まはる

おき 縁に 一と 長尾氏 逢麴先を

如く 産の 賀を 送る 酒法を 振る

の 酔後の 癖を 品評し 一と 産の 法

八心の外に 好んて 女産を 論を 我

黨のニ 三子を 進め 一と 一と 産の 法

先生 曾て 婦人の 言を 用ひ 女を 一と 猪

勝も 獲る 海内 又 伝 傳る 存 一と

和 一と 水を 飲め 又 呵く 掛田の

酒
流之始也

年賀持宴季節に物は上戸の
界名をよめて持参する

〜の上戸

那に山子連て弟もや酒棧 嫁 兩麥

泣上戸

花より来ると花もお不縁や泣上戸 南楚

泣上戸

取あ〜に喚上戸や又 弟も 三指

舞高上戸

泣舞酒に以て舞高上戸の部 画水

保原

居眠上戸

居眠上戸 射牛

業折

輕薄上戸

将を見たる世をあらく圓扇哉 左溪

右

盗人上戸

盗人の名もたて雛のゆきと酒二妙

理居上戸

きき新と理居と酔ふと酔ふと 左溟

自惚上戸

急黄須海^{掛田}上戸の義の自惚^二の部 流

恨上戸

しみゆ上戸すうきん^{瀬上} 麦陵

まき見上戸

酔ふと酔ふとまき^{梁川}やまの雨 出安

^{ツツヤキ} 證上戸

いさちのい妻とほふやま^英上戸の部 次安

^{クキキ} 口利上戸

日登とほき源一き上戸うま 一之

思見上戸

酔ふと酔ふと思見^鼻仰く^安皆と斗の言

^{トツキ} 嘔吐上戸

か茶のこぼる^透どろく^安まや^深なまみ

物好上戸

吸物又好む 粥程や飲つても 吐瀉

慰懃上戸

田植ふも 及ふつくと 酒の禮 至

は 形 嶽 上 戸

百三葉老翁

草鞋のふくく おろき上戸うね 東海

達 麴 亭 に 宴 一 二

下戸一人 世々 免つ 一 二 友 共 文

奇 心 一 吐

五十の 喜 一 二 三

子 流

醒て 見 尿 四十九斗 やる 我 の 喜

世々 世々 一 二 三 何 変 七 蓬 菜 兩 麥

山崎 三 多 歸 き 松 の 苗 咲 一 二 南 楚

洲崎 二 勤 一 二 三 一 物 菘 雅

り 小 の 中 将 殿 三 三 三 三 三 三 香 溟

あ 一 二 三 三 三 三 三 三 三 三 指

天正十一年

酒

廿六

波見遊裏寺所とさういへや 留古
 娘津さうねりぬと春川 二州
 河れおどの小判おむと多難い 夕芝
 皆美積と出ぬ 平ふ 曉水

下略

余興

人まに消して螢のり出るぬ 三保
 燈さ消へくやうぬ山や三春盡 菊豊

男と氣に牡丹をまつて水より 香俱
 山とつ積とさうおぬの夢と 芥流
 まの別道強しとさう何く 袴く
 以うぬ流やまゝとさうおぬ 子流
 山吹のさうとさうぬ水の流とさう 一笠
 さ入やたのさう 44 のさうとさう 花扇
 花の日や柳の下のさうとさう 五泉
 稲の香や千のさうにさうぬ水のさう 畠古
 切口のさうとさうぬとさう 夕芝

五五五五五五五五

酒

廿五

子法
 左溪
 三指
 菜雅
 二別
 友交
 葉紅

鐘つゆ々寺き阿水かゝの月 子 洽
 日悪このまに白く菊さき草いさり 麦 陵
 ひあふみくく流気さやみちあき世 左 溟
 念のまてし着さく木質のきく川か 子 法
 流しきや水よ影を去く 木 岩 明
 名前の流るまてく漑踏うめ 豆 苗
 世持やそあふんさう船あふまけ 卜 而
 手ゆせうくくさのせくく日菜つてい 妻 貞
 梅咲や矮難の祓掃くぬくう道 十 息

五ノ口ノ川ノ水ノ一ノ口

きつろりりふの暑さや花あふふ
洞虎
琴琴一みほくく人を詠めり
廻車

曲水や流るるつゆ家な
のゝ歌
文芝 仙意

文通

田植女のうたひてひく刈るゆり
名古名
雪雨花

ささくは内さくさく梅のま
永
諸九

叫々のぬいりて産るやききの
東武
大巻物

草抄や人の詠り人あつ
東武
吐月

穠いきのふの奥やけさの
山
ま
文
来
六
定

藤さきやまをり白き糸の
飯
相
雨 伊賀

